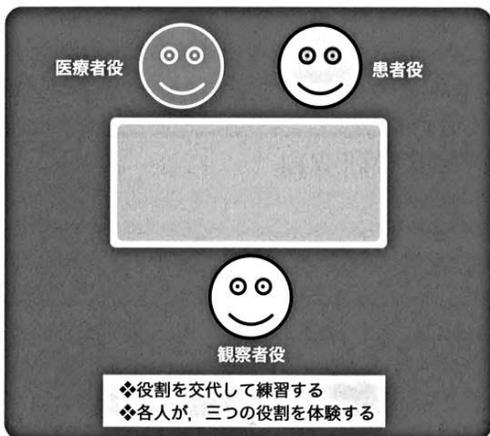


●医療コミュニケーションの学習法

よき医療者になるための医療コミュニケーションの学習の場では、学習者が三つの役割を体験することが重要だということがわかっています。第一の役割は医療者の役割です。よき医療者を演ずるトレーニングはもちろん必須のことなのですが、同時に、第二の役割として患者を演じてみることもとても役立ちます。患者を演じてみることで、患者の気持ちや立場について新しい気づきを得られるので、よりよき医療者になる際に役立つ貴重な体験が得られるというわけです。しかし、この二つの役割だけでは、まだ不十分なのです。これらの二つの役割に加えて、第



医療コミュニケーションの学習法：三つの役割

三の役割として、医療者としての自分と患者との間で生じている関係をありのまま観ている自分を演じてみる必要があるのです。つまり、医療者の視点と患者

の視点だけでなく、この第三の視点を自分の中に育てることが重要だということです。

この第三の視点は、室町時代初期に活躍した世阿弥の言葉の「離見の見」に相当します。世阿弥は父の観阿弥とともに猿楽（現在の能）を大成し、観世流として現代に受け継がれており、多くの書を残しています。

世阿弥はその著書『風姿花伝』の中で、観客に感動を与える力を「花」として表現しており、「秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず」（秘めるからこそ花になる。秘めねば花の価値は失せてしまう。すべてを見せずに、ほんの少しのことを表現することによって、観客の想像力を活用することによって、表現に膨らみを持たせようとする術）という言葉や「初心

忘るべからず」といった名言を残しています。

●医療者に求められる“第三の視点”

「離見の見」という言葉は、世阿弥が著書『花鏡』の中で、「観客の見る役者の演技は、離見（客観的に見られた自分の姿）である。「離見の見」、すなわち離見を自分自身で見ることが必要であり、自分の見目が観客の見目と一致することが重要である」と述べています。つまり、自分の姿を「離見の見」で見ることのできる「第三の視点」を持つことが、よき医療者であるための要件となる、というわけです。私どもが「成長し続ける医療者」であるためには、客観的に第三者の目で「医療者-患者関係」を見るだけで

なく、日常生活の場での人間関係でも、自分と他者との関係を、さらには人間関係だけではなく自分自身を客観的に見ることがとても大切であるということの意味しているのだと思います。

●感性を目覚めさせる「気づき」の体験

現代の脳科学の言葉で言い換えると、「離見の見」は「メタ認知」に相当します。「メタ認知」とは、人間が自分自身を認識する際に、自分の思考や行動そのものを対象として客観的に把握し認識することをいいます。また、メタ認知を行う能力を「メタ認知能力」と称しています。現在進行中の自分の思考や行動そのものを対象化して認識することにより、自分自身の認知行動を把握することができる能力のことです。

私の専門としている心身医学の領域でも、心理療法の達人と思われる域に到達したような人になると、医

療者としての自分と患者との関係を診察室の上のほうから見ている自分があることを、異口同音に語ったり、書いたりしています。つまり、医療コミュニケーション能力の上達には、「メタ認知」である「離見の見」を含む上記の三つの役割を体験して、この三つの視点を身につけることが重要だということなのです。

そこで医療コミュニケーションを学習する場である私どものワークショップでは、3人1組になって、三つの役割（医療者役、患者役、観察者役）を全部体験できるように、役割を交代しながらロールプレイを行うことを基本にしています。三つの役割を体験することにより、常に新鮮な「気づき」が生まれることを期待しているわけです。新しい「気づき」の体験が、よき医療者に必要な「感性」を目覚めさせるのだと思います。



医療コミュニケーションの学習風景

なかの・しげゆき 岡山大学医学部卒。大分医科大学教授、同附属病院臨床薬理センター長、大分大学医学部附属病院長、大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授。日本臨床薬理学会元理事長、日本心身医学会認定医・指導医、日本臨床薬理学会認定医・指導医、日本内科学会認定医、日本学術会議連携委員、日本心身医学会評議員、CRC連絡協議会代表世話人。「医療コミュニケーションの集い」のための「響き合いネットワーク」（大分、岡山、東京、長崎）の企画・運営に携わっている。

